

中国人学生と日本人学生の「面子」の概念 及びコミュニケーション・ストラテジーに 関する比較研究：量的分析の展開（その2）¹

末 田 清 子

I. 目 的

筆者は、「面子」という概念に着目し、中国人²と日本人の面子の概念の違い及びその違いが自己や他者の面子を守るコミュニケーション・ストラテジーにどのように反映されるかに関する一連の実証的研究を試みている（末田, 1993, 1995a; Sueda, 1995b）。ここで言うコミュニケーション・ストラテジーとは、自己及び他者の面子を立てようとしたり、保とうとしたり、敢えて潰そうとしたりする言動のことである。本稿では筆者のこれまでの研究を踏まえ、面子の概念及び自己や他者の面子を守るコミュニケーション・ストラテジーのあり方を構造的に把握すると共に、その概念やコミュニケーション・ストラテジーが中国人学生と日本人学生とで、そして男女間でどのように異なるかについて数量化Ⅲ類を用いて分析し考察することを目的とする。

II. 問 題

華人³にとってのフェイスの概念は二つの側面に集約される。その一方が面子 (*mien-tzu*) であり、成功や見栄によって個人が世間から得る評判や名声を意味する (Bond & Hwang, 1986; Chang & Holt, 1994; Ho, 1976; Hu, 1944)⁴。そもそも面子は、儒教の徳目の一つである「礼」の枠組みの中で発達したものである。人がそれぞれ自己の立場及び自己と他者との位置関係を弁えた上で秩序を乱さないように振る舞うこと、つまりお互いの面子を尊重することが重要だったのである (Hu & Grove, 1991)。しかし現在中国の場合、面子の社会的秩序を保持すると

いう機能よりは、経済的及び社会的資源獲得という機能の方が重要となっているようだ(末田, 1993)。なぜなら経済的及び社会的資源獲得という実質的目標達成のために、個人が世間から得る評判や名声を保ち、関係(グワンシー)いわばコネを拡大することの方が、フォーマルな社会主義組織に頼るよりも確実であるからである(園田, 1991; 宇野他, 1990)。中国から日本に伝えられ⁵、面子という言葉は近代以降、日本でも日常生活に根ざすようになった(井上, 1977)。日本に伝わった当初どのような意味であったのかは分からない。しかし、それぞれの国で「面子」の意味が変容してきたとしても、現時点でどのように違いが見られるかを実証してみることに意味があると考え。

前述のとおりこれまで筆者はデータをKJ法により分析し、一連の質的調査を行ってきた(末田, 1993, 1995a)。その詳細については本稿では触れず、仮説構築の過程を説明するために不可欠な部分を三点に絞って述べることにする。まず、日本人が中国人の面子を潰してしまった要因、あるいは中国人が日本人に面子を潰されたと感じた要因に着眼すると、その要因は一貫して“個人の能力の評価”に関わるもの(以下、「能力に関わる」と表記する)であることが分かった。しかも、これらの要因は日本人の面子を潰した、あるいは日本人が面子を潰された要因としては挙げられなかった。例えば、経済力のなさを露呈してしまったり、個人の能力のなさを人前で言及してしまった場合は、中国人の能力に関わる面子の意識を無視したことになる。それに対して、中国人が日本人の面子を潰してしまった要因、あるいは日本人が中国人に面子を潰されたと感じた要因は一貫して“社会的な立場に見合う処遇”に関わるもの(以下「処遇に関わる」と表記する)であった。また、これは中国人の面子が潰れた要因としては指摘されなかったものである。例えば、「日本人が苦心してアルバイトを紹介してあげたのに、紹介を受けた中国人が簡単に他に移ってしまった」、「意思決定のプロセスに加わることができる立場であったのに、日本人をそのプロセスに加えず、中国人が事後報告をする」、「中国人が日本人の指導教官に相談なく他の日本人の教員にアドバイスを求める」、などの行為は日本人の処遇に関わる面子の意識を無視したことになる。このように、“個人の能力の評価”に関わる面子と、“社会的な立場に関わる処遇”に関する面子が対照化され

ている⁶。

仮説1 中国人学生は事柄が個人の能力に関わる場合、日本人学生よりも面子の意識を強く感じる。

仮説2 日本人学生は事柄が処遇（社会的立場）に関わる場合、中国人学生よりも面子の意識を強く感じる。

第二に、同調査（末田、1993、1995a）の中で、中国人の能力に関わる面子の意識が投影されているコミュニケーション・スタイルも指摘されている。具体的には、「謝らない」、「相手を褒めない」、「お礼を言わない」、「自分の権利や利害を主張する」、「できない」とは言わない」などが挙げられている。一方、日本人にとっては処遇に関わる面子が重要であるので、自分も「お礼を言う」ことを重んじるが、相手が「お礼を言わない」時や、相手が自分の立場を無視したと考えられる行動をとった時に憤慨している。また、日本人は通常「謝る」、「褒める」、「お礼を言う」、「自分の権利や利害を強く主張しない」などのコミュニケーション・スタイルをとり、またそれを受け入れていることが示唆されている。

第三に、自己の面子が潰れたあるいは潰された場合にとる言動や、他者の面子が潰れたあるいは潰された場合にとる言動には、日本人と中国人とで違いが見られた。自己の面子が潰れる場合、中国人は「徹底的に自己の非を認めない」、「自己の非を正当化しようとする」、「言い訳をする」のに対し、日本人は「謝る」という傾向があることが指摘されている。一方、相手の面子が潰れてその事態が自己にも関わる場合、日本人は「自己にも非があったように一步譲る」あるいは「悪くもないのに自分が謝り、相手の面子の損失がその場で際立たないように振る舞う」傾向があるのに対し、中国人がそのような日本人の言動に違和感を感じていることが指摘された。

仮説3 自己の面子が潰れる、あるいは潰される場合、中国人学生の方が日本人学生よりも自己の面子を強固に守ろうとする。

仮説4 他者の面子が潰れる、あるいは潰される場合、日本人学生の方が中国人学生よりも他者の面子を保とうとする。

Ⅲ. 方 法

A. 調査方法

1994年6月から9月までに、留置法及び郵送により質問紙調査を実施した。面子というテーマ自体が、かなり繊細なものであることを鑑みて、架空の状況を設定する質問紙が適切だと判断した。

B. 調査対象者

調査対象者は中華人民共和国東北部の大連外国語学院に在籍する学生189名(男性:62, 女性:119, 不明:8), 北星学園大学に在籍する学生191名(男性:68, 女性:123)の合計380名である。中国人学生の平均年齢は22.40歳(SD=4.20), 日本人学生の平均年齢は19.80歳(SD=2.18)である。性別では男子学生の平均年齢が22.42歳(SD=4.61), 女子学生の平均年齢が21.16歳(SD=3.73)である。

C. 質問紙

①前半: 前述の質的調査に基づき中国人と日本人との間で面子の概念の違い及びその違いが生むコミュニケーション上の衝突として最も頻繁に挙げられた五つの状況を提供した。その状況について、どの程度「面子が潰れる」と感じるかについて、五件法(1: 全然感じない, 2: あまり感じない, 3: どちらとも言えない, 4: 少し感じる, 5: 非常に感じる)で回答させた。五つの状況のうち、状況1「友人たちと一緒に履修している科目で自分だけ落第してしまった」(以下『落第』)及び状況2「悪い成績を友人たちの前で公表された」(以下『悪成績』)は個人の能力の評価に関わる状況である。一方、状況4「ある物を友人のために別の友人から借りてあげたのに、借り主が貸主にお礼を言わない」(以下『お礼』)及び状況5「紹介してあげたアルバイトを友人が辞めてしまった」(以下『アルバイト』)は処遇に関わる状況である。また、状況3「友人の結婚式に招かれなかった」(以下『結婚式』)は個人の能力の評価と処遇の両方に関わる状況として設定した⁷。

②後半: 1「上級生との共同研究で上級生が間違えた」、2「上級生との共同研究で自分が間違えた」、3「同級生との共同研究で間違いを自

分だけのせいにされた」の三つの状況が設定されている⁸。それぞれの状況で四つのコミュニケーション・ストラテジーが、(1)他者の面子を「全く考慮しない」から「積極的に守る」順及び(2)自己の面子を「積極的に守るもの」から「全く固執しない」順に列挙されている。その四つのストラテジーから最も実行する可能性が高いものを一つ選択させた。質問紙はまず日本語で作成し、それを中国語と日本語のバイリンガルの中国人二人に翻訳を、別のバイリンガルの中国人二人にバックトランスレーションを依頼した。尚、質問紙上の人物は性別を明らかにせず、翻訳の際に適当な中国語の姓に変えた。

D. 分析の方法

前半の「面子」を感じる度合いに関わる項目と、後半の自己及び他者の面子を守るコミュニケーション・ストラテジーに関わる項目のうち四者一択の回答のみをアイテム・カテゴリーとして残した。さらに、頻度が0のものを除いた35項目について数量化Ⅲ類によって処理した。この35項目については表1に示した。固有値は第1軸で.2655, 第2軸で.2189, 第3軸で.2098, 第4軸は.1852であり、ここでは第3軸までの解釈に留める。

IV. 結 果

A. 軸の解釈

第1軸にあらわれる絶対値の大きなアイテム・カテゴリーを示すと表2-1のとおりである。第1軸のマイナス側には「悪い成績を公表されて非常に面子が潰れると感じる」や「自分だけ落第して非常に面子が潰れると感じる」があり、プラス側には「悪い成績を公表されても全然面子が潰れると感じない」や「自分だけ落第しても面子が潰れると感じない」などがある。そして『アルバイト』や『お礼』や『結婚式』の状況はプラス側とマイナス側で対照が見られない。ゆえに、第1軸は能力に関わる面子の意識を表していると言える。具体的には、マイナス側が「能力に関わる面子を感じる」側であり、プラス側は「能力に関わる面子を感じない」側であると解釈できよう。

表 1 : アイテム・カテゴリー

A 1	1.	落第	全然感じない
A 1	2.		あまり感じない
A 1	3.		どちらとも言えない
A 1	4.		少し感じる
A 1	5.		非常に感じる
A 2	1.	悪成績	全然感じない
A 2	2.		あまり感じない
A 2	3.		どちらとも言えない
A 2	4.		少し感じる
A 2	5.		非常に感じる
A 3	1.	結婚式	全然感じない
A 3	2.		あまり感じない
A 3	3.		どちらとも言えない
A 3	4.		少し感じる
A 3	5.		非常に感じる
A 4	1.	お礼	全然感じない
A 4	2.		あまり感じない
A 4	3.		どちらとも言えない
A 4	4.		少し感じる
A 4	5.		非常に感じる
A 5	1.	アルバイト	全然感じない
A 5	2.		あまり感じない
A 5	3.		どちらとも言えない
A 5	4.		少し感じる
A 5	5.		非常に感じる
B 5	1.	上級生との共同研究で上級生が間違えた	間違いを指摘する
	2.		事実のみを指摘する
	3.		間違いに気づくのを待つ
C 5	2.	上級生との共同研究で自分が間違えた	相手の言い方次第で謝らない
	3.		謝ってから言い訳する
	4.		謝る
	1.		相手に抗議する
D 5	2.	同級生との共同研究で間違いを自分だけのせいにされた	相手の非を主張する
	3.		両方の非を示唆する
	4.		黙っている

表 2-1：第 1 軸

該当例数	計測値	アイテム・カテゴリーの内容
153	-0.137	悪成績（非常に感じる）
184	-0.117	落第（非常に感じる）
70	-0.109	アルバイト（どちらとも言えない）
131	-0.088	結婚式（少し感じる）
67	-0.083	お礼（どちらとも言えない）
81	-0.068	アルバイト（あまり感じない）
77	-0.067	B 5（事実のみを指摘する）
63	0.278	アルバイト（全然感じない）
7	0.338	B 5（間違いに気づくのを待つ）
14	0.384	D 5（相手に抗議する）
40	0.422	お礼（全然感じない）
17	0.474	落第（全然感じない）
10	0.563	結婚式（全然感じない）
17	0.575	悪成績（全然感じない）

注：計測値については少数第 3 位以下は切り捨てた。

第 2 軸にあらわれる絶対値の大きなアイテム・カテゴリーを示すと表 2-2 のとおりである。第 2 軸は「面子の意識の違い」とは直接関係ないようだ。なぜなら同じマイナス側に能力に関わる『悪成績』や『落第』で「面子が潰れると非常に感じる」と「全然感じない」が併存している。処遇に関わる『アルバイト』についても対極の回答が併存しているからである。プラス側には「あまり感じない」、「少し感じる」、「どちらとも言えない」など中庸の回答が集まってはいるが、第 2 軸は面子を感じる度合いというよりは、コミュニケーション・スタイルの違いを表している可能性がある。そこで、再びマイナス側に着目すると、間違いを自分だけのせいにされて「相手に抗議する」、上級生との共同研究で自分が間違えて「相手に抗議する」、上級生との共同研究で自分が間違えても、「相手の言い方次第で謝らない」や「謝ってから言い訳する」、上級生が間違えた場合「間違いを指摘する」など、相手と自分との人間関係よりは事実を重視する傾向が見られる。これに対し、プラス側には、上級生との共同研究で自分が間違えて「謝る」、間違いを自分だけのせい

表 2-2 : 第 2 軸

該当例数	計測値	アイテム・カテゴリーの内容
10	-0.661	結婚式 (全然感じない)
17	-0.481	落第 (全然感じない)
17	-0.423	悪成績 (全然感じない)
14	-0.273	D 5 (相手に抗議する)
10	-0.221	C 5 (相手の言い方次第で謝らない)
34	-0.220	アルバイト (非常に感じる)
34	-0.149	お礼 (非常に感じる)
153	-0.132	悪成績 (非常に感じる)
159	-0.123	C 5 (謝ってから言い訳する)
109	-0.104	結婚式 (非常に感じる)
184	-0.073	落第 (非常に感じる)
63	-0.062	アルバイト (全然感じない)
151	-0.062	B 5 (間違いを指摘する)
<hr/>		
105	0.060	悪成績 (少し感じる)
67	0.071	お礼 (どちらとも言えない)
102	0.077	落第 (少し感じる)
107	0.098	アルバイト (少し感じる)
183	0.116	C 5 (謝る)
45	0.156	結婚式 (あまり感じない)
61	0.168	結婚式 (どちらとも言えない)
62	0.188	D 5 (黙っている)
52	0.226	悪成績 (あまり感じない)
33	0.243	落第 (あまり感じない)
20	0.315	落第 (どちらとも言えない)
7	0.321	B 5 (間違いに気づくのを待つ)
29	0.341	悪成績 (どちらとも言えない)

注：計測値については少数第3位以下は切り捨てた。

にされて「黙っている」、上級生が間違えて「気づくのを待つ」など事実よりもお互いの面子を重視する行動が見られる。

第3軸にあらわれる絶対値の大きなアイテム・カテゴリーを示すと表2-3のとおりである。第3軸のマイナス側には、処遇に関わる『アルバイト』や『お礼』の二つの状況及び能力と処遇と両方に関わる『結婚

表 2-3 : 第 3 軸

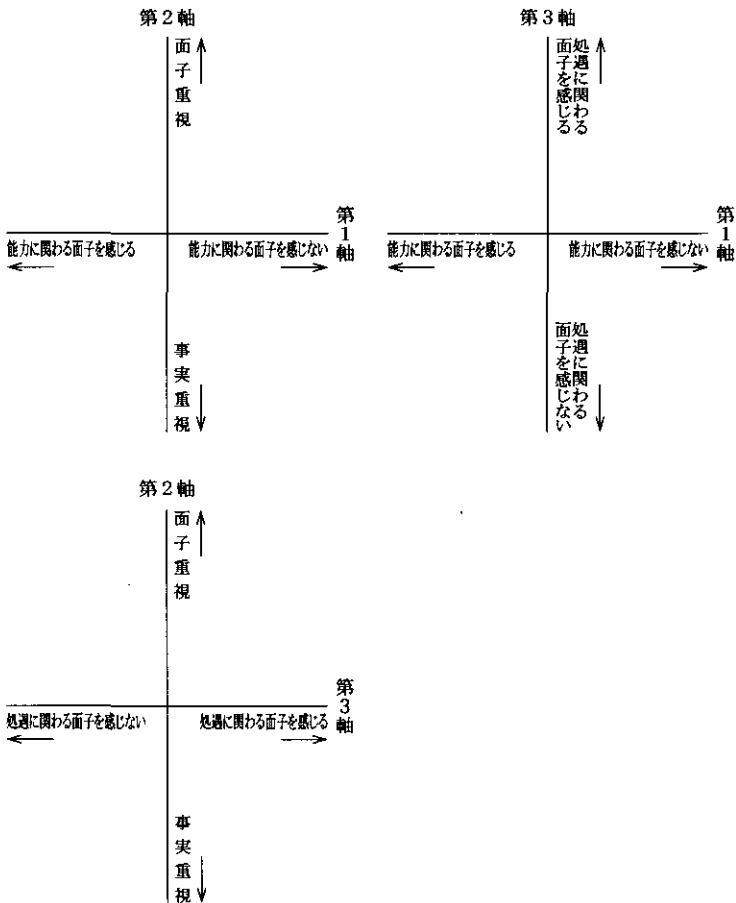
該当例数	計測値	アイテム・カテゴリーの内容
67	-0.160	お礼 (どちらもと言えない)
33	-0.153	落第 (あまり感じない)
81	-0.137	アルバイト (あまり感じない)
17	-0.129	アルバイト (全然感じない)
40	-0.118	お礼 (全然感じない)
131	-0.115	結婚式 (少し感じる)
151	-0.107	B 5 (間違いを指摘する)
70	-0.096	アルバイト (どちらもと言えない)
10	-0.089	結婚式 (全然感じない)
95	-0.084	お礼 (あまり感じない)
184	-0.063	落第 (非常に感じる)
17	-0.052	落第 (全然感じない)
120	0.066	お礼 (少し感じる)
62	0.067	D 5 (黙っている)
7	0.076	B 5 (間違いに気づくのを待つ)
192	0.083	B 5 (事実のみを指摘する)
102	0.089	落第 (少し感じる)
107	0.089	アルバイト (少し感じる)
29	0.106	悪成績 (どちらもと言えない)
14	0.287	D 5 (相手に抗議する)
20	0.440	落第 (どちらもと言えない)
34	0.466	お礼 (非常に感じる)
34	0.495	アルバイト (非常に感じる)
10	0.657	C 5 (相手の言い方次第で謝らない)

注：計測値については少数第 3 位以下は切り捨てた。

式』の状況で「面子が潰れるとは全然感じない」がある。一方『落第』や『悪成績』では「全然感じない」と「非常に感じる」が併存している。プラス側には『アルバイト』及び『お礼』の状況で非常に面子が潰れるとする項目の絶対値が大きくなっている。しかし、能力に関わる『落第』や『悪成績』に関しては「あまり感じない」、「少し感じる」、「どちらもと言えない」が見られる。またプラス側にはストラテジーでも処遇

に関わると思われる項目の絶対値が高い。例えば、自分が間違えて先輩に指摘されても「言い方次第で謝らない」のは処遇に関わると考えられる。つまり第3軸は第1軸とは対照的で、「処遇に関わる面子に対する意識」を表している。プラス側は「処遇に関わる面子を感じる」側であり、マイナス側は「処遇に関わる面子を感じない」側である。上記の軸間の関係は図1に示す。

図 1：軸間の関係



B. 軸上での中国人学生及び日本人学生のばらつき

上記の軸の解釈に基づき、それぞれの軸の計測値のばらつきを中国人学生と日本人学生で比較しさらにそれを男女に分けて表したのが表3である。

表3：各軸の計測値標準偏差

	第 1 軸		第 2 軸		第 3 軸			
中国人学生	M	.502	.350	M	.419	.438	M	.440
	F	.405		F	.320		F	.437
日本人学生	M	.693	.551	M	.710	.458	M	.474
	F	.406		F	.426		F	.448

注：M=男子 F=女子

これを見ると、全体的に計測値のばらつきは中国人学生の方が日本人学生よりも小さい。また、中国人も日本人も共に女子学生の方が男子学生よりもばらつきが小さい。全体では中国人の女子学生が一番ばらつきが小さく、日本人の男子学生が一番ばらつきが大きい。軸上での中国人学生及び日本人学生のばらつきを表すと図2、3、4のとおりである。まず、第1軸を横、第2軸を縦にとると中国人学生のデータは第3象限を中心に集まり、標準誤差は.33973であるのに対し、日本人学生のデータは第4象限を中心に広がっている。標準誤差は.54186で中国人学生よりもばらつきが大きい。このことから中国人学生は能力に関わる面子の意識を強く感じるが、面子を重視する行動よりは事実を重視する行動をとる傾向がある。それに対して日本人学生に関しては、能力に関わる面子の意識には個人差が見られるが、面子を重視する行動をとる傾向が見られると言えよう。このばらつき状態は男女合わせて中国人学生と日本人学生と比較したものを図2-1に、さらにそれを男子のみを比較したものを図2-2、女子のみに比較したものを図2-3に示した。これを見ると、中国人男子学生と日本人男子学生との間のばらつきの差の方が、中国人女子学生と日本人女子学生との間のばらつきの差よりも大きいことが分かる。

図 2-1 : 第 1 軸・第 2 軸 (中国人学生・日本人学生)

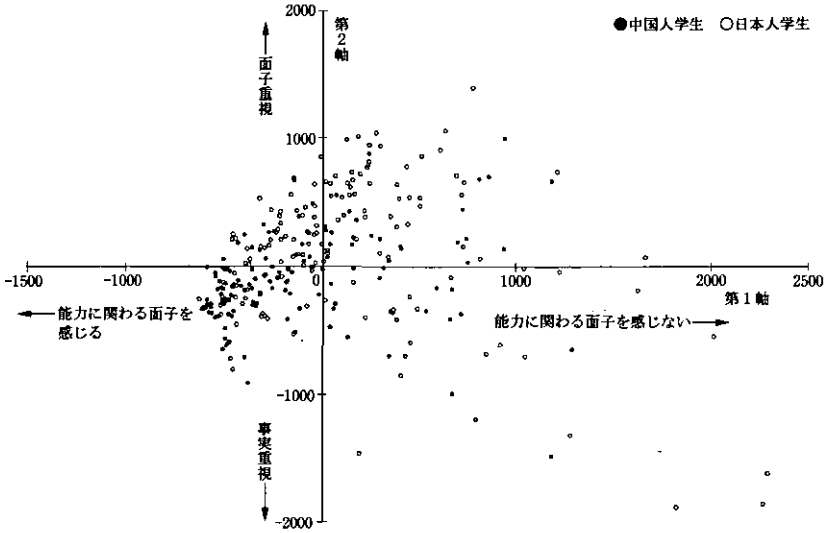


図 2-2 : 第 1 軸・第 2 軸 (中国人男子学生・日本人男子学生)

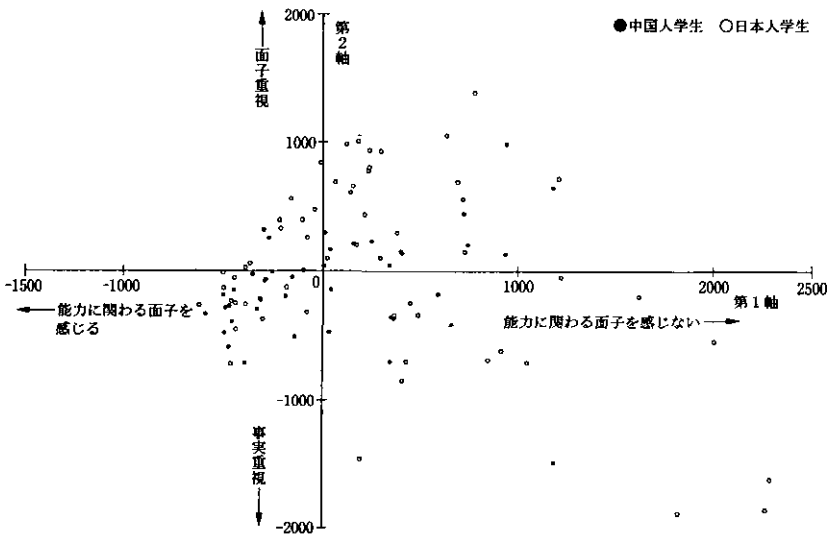
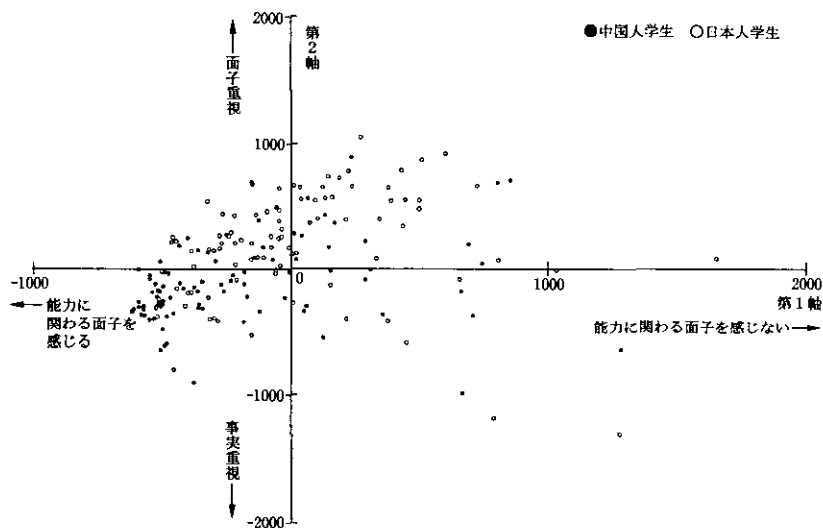


図 2-3 : 第 1 軸・第 2 軸 (中国人女子学生・日本人女子学生)



次に第 1 軸を横、第 3 軸を縦に取ると中国人学生のデータも日本人学生のデータも第 3 象限を中心に広がり、標準誤差も中国人学生は.43754 であり、日本人学生は.44827 でばらつき状態にも差がない。このばらつき状態からは両グループ共能力に関わる面子の意識は強く、処遇に関わる面子の意識はばらつきがあるものの弱い傾向にあることがわかる。このばらつき状態を図 3-1 に示した。さらにこれを男子のデータのみにして比較したものが図 3-2、女子のみにして比較したものが図 3-3 である。図 3-2 と 3-3 を比較すると、男子の方が女子よりばらつきが大きいことが分かる。

図 3-1 : 第 1 軸・第 3 軸 (中国人学生・日本人学生)

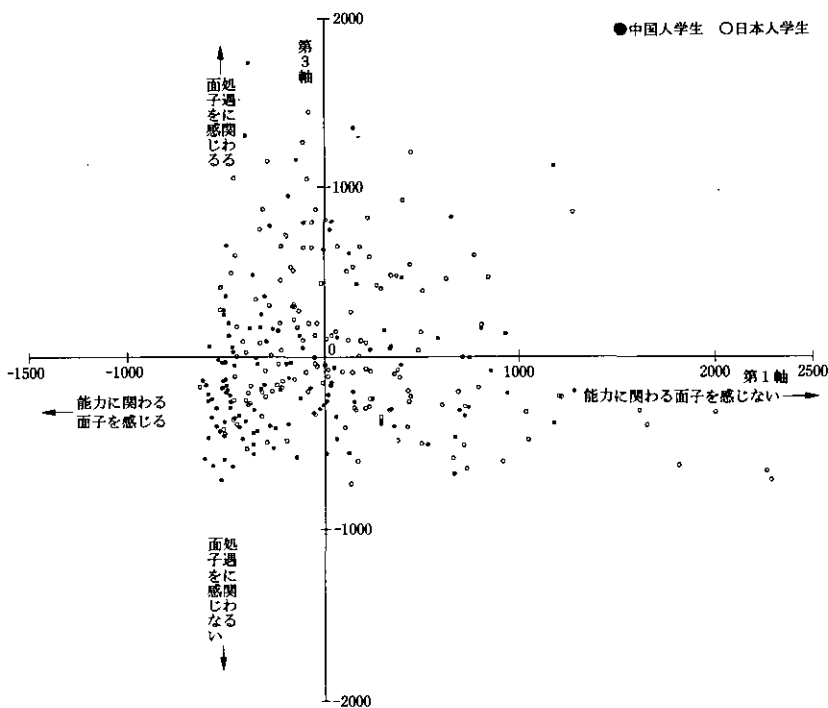


図 3-2 : 第 1 軸・第 3 軸 (中国人男子学生・日本人男子学生)

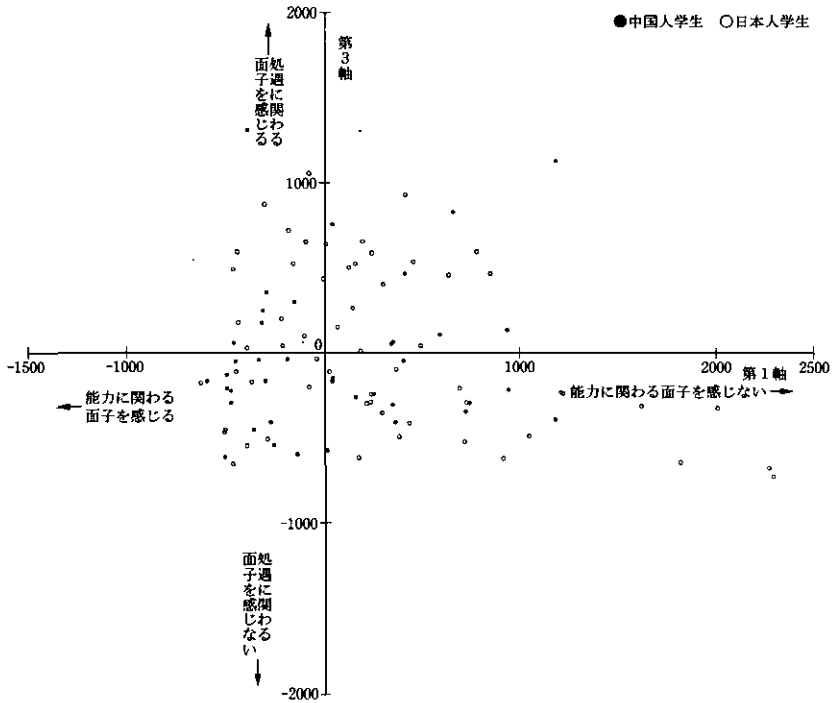
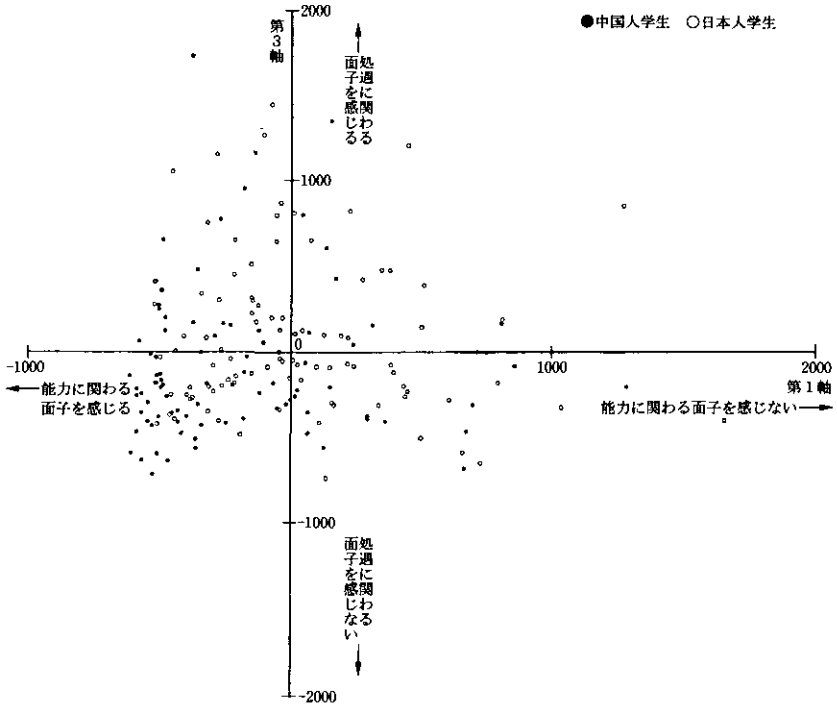


図 3-3 : 第 1 軸・第 3 軸 (中国人女子学生・日本人女子学生)



さらに、第 2 軸を縦、第 3 軸を横に取ると中国人学生のデータは第 3 象限を中心に広がり、標準誤差は .34967 であるのに対し、日本人学生のデータは第 1 及び 4 象限を中心に広がり、標準誤差は .55309 である。中国人学生は処遇に関わる面子をあまり感じないし、事実を重視する行動をとる傾向があることがわかる。しかもこの傾向にばらつきが少ない。日本人学生はこれに対し、処遇に関わる面子の意識を感じるか否かについては個人差があるものの、事実よりは自己や他者の面子を重視して行動する傾向があると言えよう。このばらつき状態を図 4-1 に示した。さらにこれを男子のデータのみにして比較したものが図 4-2、女子のみにして比較したものが図 4-3 である。これを見ると、全体としては事実を重視する行動をとる中国人学生でも、男子学生の場合かなりばら

つきが見られ、女子学生は事実を重視して行動をとる側に集中していることが分かる。

図4-1：第2軸・第3軸（中国人学生・日本人学生）

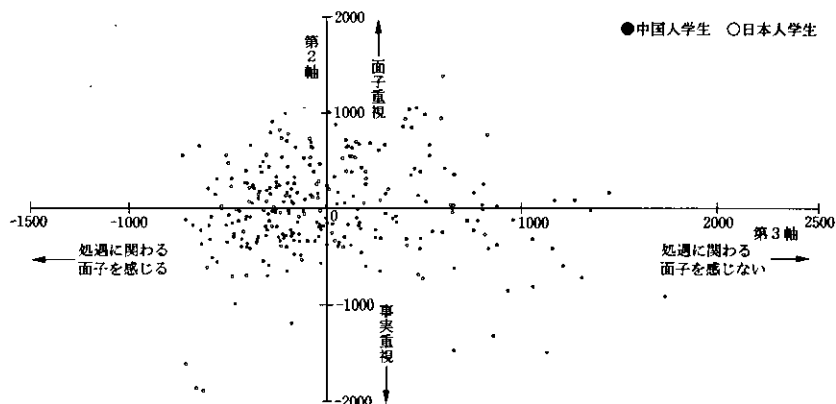


図4-2：第2軸・第3軸（中国人男子学生・日本人男子学生）

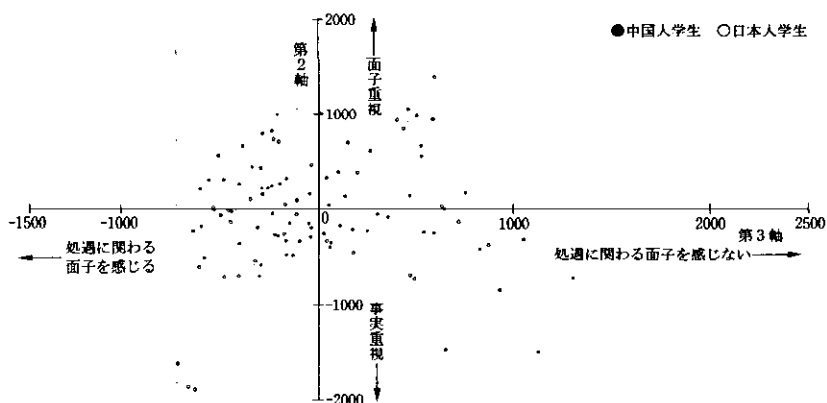
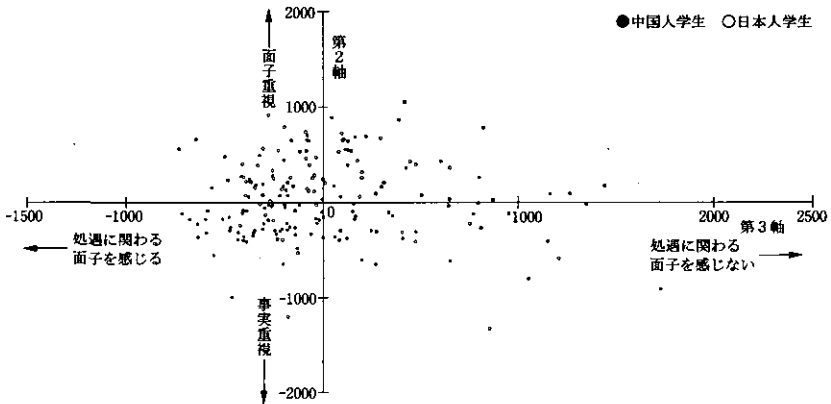


図4-3：第2軸・第3軸（中国人女子学生・日本人女子学生）



V. 考 察

本調査の被験者全体から得られたデータを構造的に見ると、第1軸は、「能力に関わる面子を感じるか否か」に関わる。第2軸は、「面子を重視した行動をとるか事実を重視した行動をとるか」に関わり、第3軸は「処遇に関わる面子を感じるか否か」に関わる。軸上の中国人学生及び日本人学生のデータのばらつきに着目すると、中国人学生の能力に関わる面子の意識は一樣に強い。これに対して、日本人学生の能力に関わる面子の意識には、ばらつきが見られる。故に仮説1は支持されたと言えよう。また、中国人学生は処遇に関わる面子の意識が一樣に弱い、日本人学生の処遇に関わる面子の意識には個人差が見られた。従って、仮説2は部分的に支持されたと言えよう。

次に、日本人学生は「自己及び他者の面子を重視するか事実を重視するか」については、一樣に自己及び他者の面子を重視した行動をとる。これに対して中国人学生は、「自己及び他者の面子を重視した行動をとるかあるいは事実を重視するか」については個人差が見られる。つまり、自己の面子が潰れるあるいは潰された場合にも、中国人学生は必ずしも自己の面子を守ろうとする訳でもないという結果が出た。従って、仮説

3は支持されなかった。また、他者の面子が潰れた場合、日本人学生は一樣に事実よりも面子を重視した行動をとる。これに対して、中国人学生は他者の面子が潰れても事実を重視した行動を一樣にとる。このことから、仮説4は支持されたとと言える。

ばらつき状態の男女差に着眼すると、中国人及び日本人共に、男子学生のデータの方が女子学生のデータよりもばらつきが大きい。第1軸、第2軸、第3軸の全てについて、ばらつきの大きい順に並べると、日本人男子学生、中国人男子学生、日本人女子学生、中国人女子学生である。このことから、面子に対する意識やコミュニケーション・パターンについては、男子の方が女子よりもばらつきが大きく、特に日本人男子については最も大きい。また、先行研究(例:Petronio,1984; Shimanoff, 1994)では、一般的に男性よりも女性の方が相手と自己のフェイスを重視して行動する傾向があるとされている。本調査の結果では日本人女子学生は自己及び他者の面子を重視した行動をとるので、この結果は当該議論を支持することになる。しかし、中国人女子学生については事実を重視する行動をとる傾向が強いことがわかった。故に、必ずしも先行研究の議論を支持することにはならない。

VI. ま と め

本稿では、数量化Ⅲ類を用いて中国人と日本人の「面子」の意識の質的な違いとその違いから来るコミュニケーション・スタイルの違いを構造的に把握しようと試みた。本調査の結果を、中国人学生と日本人学生という出身国の違いとするか、あるいは学生集団の持つ意味の違いと解釈すべきかどうかについては判断しかねる。なぜなら、年齢及び社会経験の有無という点で、日本人学生と中国人学生との比較にはその妥当性については限界があるからである⁹。しかし、本調査の結果は筆者のこれまでに行ってきた分散分析等(末田, 1995c)の結果を補完する形で、新たに以下の二点を浮き彫りにした。

第一に、中国人学生は自己及び他者の面子を重視した行動をとるかあるいは事実を重視するかには個人差が見られるが、能力に関わる面子の意識は一樣に強い。これに対し、日本人学生は能力に関わる面子の意識

を感じるか否かについては個人差があるが、自己及び他者の面子を重視した行動を一様にとる。

第二に、個々のグループのデータを数量化Ⅲ類を用いることにより、構造的に把握することが出来た。本調査の結果では、日本人学生のデータの方が中国人学生のデータよりもばらつきが大きく、男子と女子を比べた場合は男子の方が女子よりもばらつきが大きい。全体として、日本人男子学生のデータのばらつきが最も大きく、中国人女子学生のデータのばらつきが最も小さい。このことは、面子という概念自体への関心の高さや低さを反映しているとも考えられる。

今後の課題として四点挙げたい。まず、今回の調査は対象が中国人に限定されているので、華人の中でも地域あるいは国によって面子の意識や行動パターンにどのような質的差が見られるかに枠を広げる必要性がある。第二に、華人の面子を論じる場合、自己と他者の立場の上下というよりは、黄(園田, 1995)が論じるようにどのような種類の関係にあるか、つまり道具的關係か、情緒的關係か、その中間的關係かの方が重要だという見方もあり、このような関係のあり方に着眼する必要もあろう。第三に、関係のあり方を要因として加えると男女差にもどのような影響を与えるかについて考察することも価値のあることである。最後に、面子を重層的にとらえ(例:日本人として、男性として、会社員として等)社会的カテゴリー理論(例:Tajfel, 1981; Turner & Oaks, 1986)との関わりからも分析するような試みに挑みたい。

〔註〕

1. 本稿で取り扱う調査は第36回日本社会心理学会で発表されたもの(末田, 1995c)と同一である。しかし、分析の方法は全く別の方法であり、今回のデータは未発表のものである。調査票の作成に関して大連外国語学院の蘇桂全先生、李淑云先生、桜美林大学の周義華さん、陳啓顕さんにご協力頂いた。また、調査票回収については、大連外国語学院の徐甲申先生、蔡全勝先生をはじめ日本語学部の先生方にご協力頂いた。また、本学社会福祉学部の大坊先生、岡本先生(元北星学園大学)他諸先生方に貴重な助言を頂いた。改めて感謝申し上げたい。

2. 中華人民共和国在住及び出身者とする。これまでも主に教育機関に所属する人々を対象とした質的調査を行ってきた。
3. “華人”とは国家レベルを超えた単位で、中華文化圏に所属する人の総称とする。従って、中国人（中華人民共和国）、台湾人、マレーシア及びシンガポールに住む華人などを含む。
4. 他方は、個人が社会の道徳的な規範に従おうとする臉 (*lien*) に関わるもので、日本語では「恥」に匹敵する。これは必ずしも相手の存在を必要とするわけでもなく、全ての人に共通する基本的なもので、一度喪失したら修復できない。また、この二側面にも共通項があり、必ずしも分類出来ないとする研究者もある。
5. いつ頃、伝えられたか定かではない。
6. 筆者はこれまでの研究及び本稿で、“能力に関わる面子”と“処遇に関わる面子”をネガティブ・フェイスに近いものとポジティブ・フェイスに近いものとして表現してきた。ポジティブ・フェイスに(1)受け入れられたいという欲求、(2)自分の能力が評価されたいという欲求の二面が含まれると考えている研究者達もいるが、筆者はポジティブ・フェイスは“社会的に相応しいと認められるか否かに関わる”と考えた。つまり自己の行為がいかにその社会の道徳的規範やルールに適っているかに関わるものと考えた。Lim & Bowers (1991) も論じているように、受け入れられたいという欲求と能力を評価されたいという欲求はマズローの欲求階層説では前者が所属の欲求であり、後者が自尊の欲求に関わる。むしろ、能力の評価に関わるフェイス・ニーズは本来Brown & Levinson (1978) が定義した能力のある (*competent*) 大人であることを認められたいというネガティブ・フェイスに近いと考えられる。いずれにしてもポジティブとネガティブという概念自体が文化によっても解釈が違う可能性があるので、本稿の仮説の表記の仕方がこれまでと多少違うということを述べておく。また、Lim & Bowers (1991) が提示した自尊 (*autonomy*)、所属 (*fellowship*)、能力 (*competence*) の三種類のフェイス・ニーズに照らし合わせると、前者は能力 (*competence*) を認められたいというニーズに呼応しているが、後者は残りの二つに対応していない。故にこのように記すことにする。

7. 筆者は先行論文(末田, 1993)をまとめる調査で「結婚式に招かれない」という状況に関して中国人と日本人の解釈に差を認めた。中国人は傾向として、結婚式を自分がどのような重要人物と交友があるか(つまり、自己の能力)を知らせる機会であり、もし友人が結婚式に招いてくれなかったら、自分を重要人物だと考えていない、つまり面子が潰れるととらえていた。これに対し、日本人は結婚式に招かれること自体よりも招かれてどのような役(スピーチなど)を担うか、自分がどのように扱われるか(自分の処遇のあり方)にむしろ面子を感じるようであった。故に、ここでは『結婚式』が能力及び処遇の両方に関わるものとした。
8. この状況設定も筆者の先行調査から頻出した事例であり、Lim & Bowers (1991)の調査を参考にした。
9. 多少の社会人がいるとしても、本学の学生は年齢的にも社会経験の有無という点で、かなり均一である。それに対し、大連外国語学院はその大学の特性上、一般企業から派遣されたり、就職のために他の大学を卒業しても再度入学する学生も多々いるようだ。

〔引用文献〕

- Bond, M. H., & Hwang, K., 1986, The social psychology of Chinese people. In M. H. Bond (ed.), *The psychology of the Chinese people* (pp. 213-266). London: Oxford University Press.
- Brown, P., & Levinson, S., 1978, Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction* (pp. 56-289). New York, NY: Cambridge University Press.
- Chang, H., & Holt, R., 1994, A Chinese perspective on face as inter-relational concern. In S. Ting-Toomey (ed.), *The challenge of facework* (pp.95-132). Newbury Park, CA: Sage.
- Ho, D., 1976, On the concept of face. *American Journal of Sociology*, 81, 867-884.
- Hu, H. C., 1944, The Chinese concept of "face". *American Anthropologist*, 46, 45-64.
- Hu, W., & Grove, C. L., 1991, *Encountering the Chinese*. Yarmouth,

ME: Intercultural Press, Inc.

井上忠司, 1977, 『「世間体」の構造』NHKブックス.

Lim, T., & Bowers, J. W., 1991, Facework: Solidarity, approbation, and tact, *Human Communication Research*, 17, 415-450.

Petronio, S., 1984, Communication strategies to reduce embarrassment. *The Western Journal of Speech Communication*, 48, 28-38.

Shimanoff, S., 1994, Gender perspectives on facework: Simplistic stereotypes vs. complex realities. In S. Ting-Toomey (ed.), *The challenge of facework* (pp.159-207). Newbury Park, CA: Sage.

園田茂人, 1991, 関係主義としての中国. 野村浩一・高橋満・辻康吾編, 『もっと知りたい中国Ⅱ社会・文化編』, 40-56. 弘文堂.

園田茂人, 1995, 中国社会の「関係主義」的構成. 日本現代中国学会大会 (1994年10月) 発表論文.

末田清子, 1993, 中国人が持つ面子の概念と日本人とのコミュニケーション. 年報社会学論集, 6, 191-202.

末田清子, 1995a, 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い: 中国人と日本人. ヒューマン・コミュニケーション研究, 23, 1-14.

Sueda, K. 1995b, Differences in the perception of face: Chinese *mien-tzu* and Japanese *mentsu*. *World Communication*, 24, 23-31.

末田清子, 1995c, 「面子」の概念とコミュニケーション・ストラテジー: 大陸中国人, 南方中国系人, 日本人. 『日本社会心理学会第36回大会論文集』, 356-359.

Tajfel, H., 1981, *Human groups & social categories: Studies in social psychology*. London, U.K.: Cambridge University Press.

Turner, J. C., & Oakes, P. J., 1986, The significance of the social psychology with reference to individualism, interactionism and social influence. *British Journal of Social Psychology*, 25, 237-252.

宇野重昭他, 1990, 『岩波講座現代中国別巻二・現代中国案内』岩波書店.

Abstract

A Quantitative Study of Differences in
Mien-tzu or *Mentsu* between Chinese
and Japanese Students (Part 2)

Kiyoko SUEDA

The purpose of this study is to test the hypotheses drawn from the author's continuing research on differences in the perception of *mien-tzu*, or *mentsu*, and face-giving or saving strategies between Chinese (People's Republic of China) and Japanese. 189 Chinese and 191 Japanese undergraduate students participated in the study. The data was structurally analyzed using Hayashi's Quantification Method III.

The hypotheses were partially supported. Four findings should be noted. First, Chinese students overall are highly conscious of *mien-tzu/mentsu* when the issue concerns the evaluation of one's competence while Japanese students vary widely in their level of concern. Second, most Japanese students are likely to engage in both face-saving and giving strategies, while the Chinese showed a wide variance in face-giving and saving preferences. Third, the data from Chinese female students does not support the often cited argument that females are more sensitive to one's and the other's face concern. Last, in terms of both the degree of their perceived loss of *mien-tzu/mentsu*, and communication strategies, the variance was greater for the Japanese students than for Chinese students. Also, the variance was greater for males than for female students.

北星学園大学文学部 北星論集第34号 正誤表

頁・行目	誤	正
21頁5行目	華人	人々
66頁17行目	すべ__	すべて
67頁下から 10行目	ル__シー	ルニシー
82頁1行目	__り	かかり
82頁下から 9行目	ラトウ__ツジ	ラトウイツジ
91頁2行目	完読	完結